

二〇二〇年度 卒業論文

『安楽集』における救済の思想について

L 1 7 0 1 3 6

山内 大河

目次

序論	1
本論	3
第一章	3
第一節	3
道綽の仏教観と浄土教信仰の特徴	3
第二節	5
道綽の『安楽集』の著述の背景とその特徴	5
第二章	6
第一節	6
『安楽集』の浄土教思想の特徴―約時被機と准通立別―	6
第二節	8
「約時被機」について	6
「准通立別」について	8
第三章	11
第一節	11
『安楽集』に説かれる有相の浄土と来迎思想の意義	11
第二節	13
『安楽集』に説かれる有相の浄土と来迎	11
『安楽集』に説かれる来迎と信心の關係	13
第四章	14
第一節	14
『往生論註』における自力・他力	14
第二節	19
『安楽集』における自力・他力	19
結論	23
註	
参考文献	

序論

私が何故道綽と『安樂集』を主にテーマとして卒業論文を作成するに至ったのかという経緯としては、私が大学三回生時にゼミを受講するにあたり浄土教理史を選択したことと、その講義の中で『安樂集』を著した道綽の思想に興味を持ったからという二つの理由である。まず前者については、私は三回生である一年間ゼミやその他の講義で浄土教理史について学んだ。大学を卒業するための卒業論文を作成するのであれば、是非一年間で習ってきた浄土教理史に関連のある内容を用いて作成を試みたいと考えたのが理由である。次に後者については、たとえば杉山裕俊が「『安樂集』における自力・他力について」の内容の中に示されているように道綽の自力と他力は対立した存在ではなく、それぞれが浄土に往生するために必要となる過程なのであるという考え方に感銘を受けたのが理由である。浄土教における自力・他力について『浄土真宗聖典』内の巻末註に意味が示されているのである。はじめに、自力についてはこう示されている。

阿弥陀仏の本願を疑い、自分の修めた身口意(からだ・言葉・心)の善根によって浄土へ往生しようとすること。(『註釈版』一五〇四頁)

浄土教における自力とは阿弥陀仏の力を信じず、自分自身の修行による力と善行によって浄土に往生するということであり、独りよがりな印象が与えられている。次に他力についてはこう示されている。

阿弥陀仏の本願力。阿弥陀仏が衆生に往生の因と果を与えて救済するはたらき。また、はからいなく本願力にまかせることを他力ともいう。(『註釈版』一五一六頁)

浄土教における他力とは阿弥陀仏の力によって往生すること、救われるという意味であり、この場合の他力や他力本願とは自分では何も考えない無責任な他人任せといった世間でいわれる悪い意味として捉えられるのではなく、良い意味として使われている。例えるのであれば体を鍛えるために筋肉のトレーニングを行う時に、自分で筋トレの本や動画を見るなど情報を収集して独学で学びながらトレーニングを行うかジムに通いトレーナーに実際に教わるなどサポートしてもらいながら行うかの違いである。一般では、自力・他力は意味も全く正反対であり相容れない二つのものであると考えるのが普通とされているのであるが、それらを違う角度から視察し自力・他力を結びつけて新たな視点を見つけ役割を与えろといった道綽の発想及び思考力は私の頭の中にはない柔軟性を併せ持っており新鮮かつ斬新に映ったのである。以上が道綽と『安楽集』を主にテーマとして作成をするに至った経緯である。

次に卒論を作成するにあたって道綽と著書である『安楽集』を研究する目的は、『安楽集』の特徴とは何かや浄土の歴史において道綽の生きていた時代の浄土やその中における自力・他力など、それらに対する道綽の思想が他の僧と比べて如何なるものであったのかを理解するためである。道綽は自力と他力に新たな意味と役割を与えることで、二つを必要過程にするという浄土往生の重要性を強めかつ新しい浄土の世界を開くに至った。これらを理解することによって、いつの時代または浄土の世界においても人間は様々な発想力や考え方、時代に対する自分の意見など主体性を持っていたということが実証出来るのである。そして、柔軟性を併せ持った自分の考えと意見を発信することが時によって、一つの問題解決に繋がる可能性へと見出せるのである。新しいものを生み

出すためには、今までにあったものを崩し新たに再構築することも必然的になるのである。以上が『安樂集』と道綽の研究目的である。

私は、『安樂集』と道綽の特徴を当時の浄土思想と道綽の自力と他力についてなどの思想を併せて論ずる。論文を通して、先述の道綽と『安樂集』の特徴は如何なる物であるかを結論に導き出していく。

本論

第一章 道綽の仏教観と浄土教信仰の特徴

第一節 道綽の生きた時代の仏教と浄土教信仰

道綽の伝記について『浄土真宗聖典』の巻末註ではこのように示されている。

十四歳で出家し『涅槃経』を究めたが、石壁玄中寺の曇鸞大師(四七八―五四二)の碑文を読み、四十歳で浄土教に帰依したという。(『註釈版』一五一―一八頁)

道綽は現在でいう中学二、三年生の年齢で僧侶となり『涅槃経』を究めた後に、曇鸞の碑文を読み四十歳の時に浄土教を自分自身の拠り所としたのである。また、次のようにも示されている。

以後、日々念仏を称えること七万遍、『観経』を講義すること二百回以上に及び、民衆に小豆念仏(小豆で念

仏の数量を数えること)を進めた。(『註釈版』一五一八頁)

道綽は浄土教に帰依してから七万回念佛を称えたり二百回以上の講義を行うなど、ストイックに修行をし続けてきた。そして、道綽は小豆念佛といったその名の通り小豆を使用した少しくユニークな念佛方法を民衆に進めるなどして、浄土教を広めていったのである。また、三浦大地の「道綽の善知識観」では、道綽の思想について次のように示されている。

私見になるが、道綽は特に曇鸞から思想的影響、また凡夫として生きる仏弟子としての姿勢を仰いでいるのであろう。

道綽の思想は数人の僧の中で特に曇鸞からの影響を受けている部分が多いということなのではないかということがこの文章で解釈がなされている。また曇鸞について煩惱にとらわれており迷いから抜け出せない立場でありながらも仏弟子として生きる姿に道綽は尊敬しているのではないかと解釈がされているのである。道綽が特に曇鸞からの影響を受けているという部分は「『安樂集』に曇鸞の文が多く引かれている」ことから明白となっているのである。そんな道綽が生きた時代において浄土はどのような見解をなされていたのであろうか。また野村淳爾の「『安樂集』における他力の一考察」では、次のような解説がなされている。

道綽の時代は往生思想が執着そのものという考えや無相空理の視点から浄土願生を否定する思想が非常に大きな勢力となっており、浄土という有相を取ること自体が執着と同様と考える風潮が強かった。

これによると、道綽の時代では自分の姿形や一切の執着から離れた無相思想が当時のマジョリテイとなっており、

その対となる浄土に生まれ変わるといふ有相思想は大乗仏教の空・無相の基盤から離れていると否定されていたのであり、浄土そのものが修行において障害になる心の働きとみなす考えが大きくなっていったのである。言い換えれば、浄土という一つのこと執着して生まれ変わるといふ考えを持っている者はださいという風潮が強くなっていったのである。これについて道綽はこのように示したことが次のように記述されている。

この問題に対して、道綽は他力を阿弥陀仏の来迎という具体想で示し、西方浄土の問答と結びつけることにより、西方浄土の教えの大乗としての正当性を示しているのである。

道綽は、他力の原理とは阿弥陀仏が私達を迎えに来ること浄土に往生することが出来るのでであると示し、西方浄土の教えである大乗とのつながりを示したのである。つまり無相思想と有相思想、それぞれの思想を一つに結びつけたのである。このように道綽は時代の流れを真っ向から新たな形へと変えようとした。人間は一般的に自分の中にある不安と孤独を拭い去るために意見が多い内容についていく傾向があるが、道綽は周りの意見に流されることなく自分の意見を新しい答えへと結びつけたのである。そんな道綽が著した『安楽集』とは、一体どういった特徴を持っているのであるのだろうか。

第二節 道綽の『安楽集』の著述の背景とその特徴

『安楽集』について『浄土真宗聖典』の巻末註では、このように説明が示されている。

十二章からなる。『観経』にもとづいて安楽浄土への往生を勧めたもの。浄土教に対する疑難について問答を

設けて解釈し、時機相応の法として念仏を勧める。（『註釈版』一四四四頁）

『安楽集』とは、道綽が『観経』にもとづき安楽浄土への往生を勧めると同時に、浄土教への疑問と非難に問いを求めることによって燃焼していき、念仏を時代と能力に相応している修行法として勧めているのである。また、説明にも示されている通り十二章に分けられて構成がされている。この点については入江公昭が「『安楽集』における浄土理解の一考察」において「道綽の主著『安楽集』は、『観経』の要義を示した書物として理解されている」と示されているように、『観経』の重要な趣旨を伝えることが『安楽集』の主な役割りとされるのである。要するに道綽は、浄土を批判する勢力が多かった時代の中で著書を通して浄土教に関する問題を解消させることによって浄土教に対する不信感を少しでもなくしてそこから進んで往生浄土のための修行を行うのがよいと考え、『安楽集』を著したのである。

第二章 『安楽集』の浄土教思想の特徴―約時被機と准通立別―

第一節 「約時被機」について

内藤知康が著した『安楽集講読』では、『安楽集』の特徴として「約時被機」と「准通立別」を指摘している。初めに約時被機とは、「仏教には種々様々の教法があるが、いずれも時機すなわち時代と根機との対応を考慮しなければならぬという考え方」であると示している。

また、渡邊隆生が著した『安樂集要述』では約時被機の被と機は「末法時の機根（衆生）」を指しており、つまりは末法時代の衆生という意味である。以下のように説明がされている。

道綽が明確な末法意識を自覚したことによって、仏教のなかに「浄土の一門」を樹立したということ、『安樂集』の教学史的使命としてみることである。

簡潔にまとめると、末法の時代において新たに浄土教という教学を発展させることが『安樂集』における使命であり役割のひとつであるということである。また、約時被機の考え方について、次のように具体的に説明がされている。

仏道を歩もうとする者は、自らの適性を考慮して教法を選ぶべきであるということになる。『安樂集』に示される道綽禅師の教学には、このような視点が基本に据えられているといえよう。

これはつまり、約時被機とは仏教を学ぶ時に自分の性格を客観視し自分に合った内容の教法を選ぶことという意味である。教法の種類は様々であり「釈尊在世の時代やその後しばらくの衆生に適した教法」や「釈尊滅後たるか後の時代の衆生に適した教法」、また「迷いから悟りに向かって歩むのに勝れた能力・素質を持つ衆生に適した教法」や「そのような能力を殆ど持たないか、全く持っていない衆生に適した教法」などといった多くの教法があり、自分にはどの教法が合うのかや自分がいかなる人間なのか分かるのである。人には性格によって向き不向きがある。今まで受け続けてきた教育や周りの環境によって自分という人格が形成され続け、今現在における人格もとい性格の自分がこの世に存在するのである。そのため人生において選択は必須となる。そ

れによって自分との相性がどういったものがはっきりとなるのである。大学の講義を受けるときにおいてもそうである。講義には必須科目もあるが、それ以外の科目は自分で選択することが出来る。そこで、講義内容を見て自分にはどの講義が合っているのか、そしてどの講義を受けたいかを自分の性格を分析し配慮して選ぶのである。大学のゼミを選ぶときにおいてもどの分野の内容が自分に合うのかを分析することとなる。就職活動においてはより細かく自己に対する分析からの職業選択が必須となるのである。自分の性格を自己分析してどの企業が自分とマッチしているのかを研究し、そこからエントリーシートの添削や面接練習など就職のための対策をすることが必要となるのである。このように自分と相性の良いものを選択するという考えは昔から存在しており、現代においても接点として通ずる部分がある。

第二節 「准通立別」について

次に准通立別とは、「通途を准じて別途を立てるという意味」である。通途とは仏教において一般的な考え方という意味であり、別途とは浄土真宗にて独自の特別な教えという意味である。ちなみに、通途・別途の用法は準拠ではなく、「時に通途が聖道門自力の考え方、別途が浄土門他力の考え方を意味している場合も必ずしも少なくはない」とされているのである。これによると、一般的には他力が通途で自力が別途と考えられるのではなく、その逆もあるという意味である。この点について渡邊隆生の『安楽集要述』では次のように説明がされている。

通は道綽の言葉に「通論家」とあるように、道綽当時における一般仏教界を指したときには道綽の「聖浄二門」の立場でいう聖道門仏教を指すといえる。

つまり道綽の准通立別とは通途が聖道門自力を、別途が浄土門他力を指していたのである。これらの点について、まとめて野村淳爾は次のように説明している。

道綽禅師の教化法は、当時の仏教界の大勢であった聖道門自力の考えに従いつつ、浄土門他力の独自の考え方を打ち出すものであり、このような教化法を准通立別の語で表現するのである。

また、『安楽集要述』でもこのように説明されている。

一般の通仏教との会通をはかりながら浄土を別途に独立せしめて末法時の証道を確立せんとした『安楽集』の役割を表現したといえる。

これらの説明によると、道綽の時代では聖道門自力が通途であり浄土門他力が別途であり、浄土を否定する勢力が強くなっていたということである。ちなみに聖道門自力と浄土門他力については、杉山裕俊は法然が著した『浄土宗大意』にてこのように示されていることを挙げている。

聖道門トイフハ、娑婆ノ得道ナリ、自力断惑出離生死ノ教ナルカユヘニ、凡夫ノタメニ修シカタシ、行シカタシ。

これは、聖道門とは自分ひとりの力だけで往生するために様々な修行を行うということであり、難しいということである。また、杉山は法然が浄土門他力についてはこのように示されていることを指摘する。

浄土門トイフハ、極楽ノ得道ナリ、他力断惑往生浄土門ナルカユヘニ、凡夫ノタメニハ、修シヤスク行シヤスシ。

これは、浄土門は阿弥陀仏という本願力を借りて浄土に往生するので修行がやりやすいということであり、意味からして聖道門の対となるものであり自力と他力の違いを明確にあらわしているのである。要するに准通立別とは当時マジヨリテイとなり主流となっていた考えに今まで通りに従いながらも新しく登場した独自の考えを試みとして取り入れるという意味なのである。この試みという部分では、現代でも接点がある。例えるならば、料理の調理や味付けにおいても調理方法は今までと同じ方法で作り、最後の味付けは一風変わった隠し味をつける。そして、新しく多種多様な味わい方を楽しむことが出来るというように古くからの考えと新しい考えという二つの要素を合わせる実験を行うのである。

これらのことから約時被機と准通立別は、いずれも意味において現代に通用する部分があるという特徴があるのである。以上が『安樂集』の特徴についてである。ここからは『安樂集』の内容へと入っていく。内容の中で道綽の思想が如何なるものなのであるかを具体的に論じる。また先述において、道綽は無相思想と有相思想における問題について説いてきたがそれに関してより詳しく論じる。

第三章 『安樂集』に説かれる有相の浄土と来迎思想の意義

第一節 『安樂集』に説かれる有相の浄土と来迎

まず最初に、無相思想と有相思想における問題について詳しく論じる。先述にて道綽は大乗仏教の空・無相の基盤から離れていると言われる有相思想について、他力は阿弥陀仏の来迎であると示し西方浄土の問答と結びつけその教えである大乘としての正当性を示したのである。これについて『安樂集』の第五大門・禅観難易ではこのような問答がされている。

問ひていわく、もし西方の境界勝にして禅定をなして感ずべくは、この界の色天は弱くして禅定をなして招くべからざるや。（『註釈版七祖篇』二六五頁）

これは、もしも西方の境界は優れているから浄土に集中する精神となる修行をすることで往生出来るのであれば、この世界で物質や肉体から脱却出来ていない色界は劣っているのでこの修行をして浄土に往生することが出来ないのではないかという問いである。この問いに対してこう答えられている。

答へていわく、もし修定の因を論ぜば、彼此に該通す。しかるにかの界は位これ不退にして、ならびに他力の持つあり。（『註釈版七祖篇』二六五～二六六頁）

これは、もし修行の原因をいえば浄土もその他も通じて生まれることが出来るが、浄土は後戻りすることのない場所で阿弥陀仏の本願力といった他力の支えがあるから優れているということを説いたのである。この文の「他力の持つあり」という部分が、西方浄土は「阿弥陀仏の本願力により支えられている」ということを示している

のであり、西方浄土における正当性が道綽によって示されているのである。他にも、他力と阿弥陀仏の来迎について示した文がある。第二大門の破異見邪執・心外無法ではこのような文が示されている。

命終の時にすなはち現に阿弥陀仏、もろもろの聖衆とその人の前に住したまふを見たてまつることを得て往生を得。（『註釈版七祖篇』二二二頁）

これはつまり、命が終わり亡くなる人の前に阿弥陀仏が多く、聖者達と一緒に現れるのをその人が見てたてまつることで往生を得ることが出来るということである。次に第四大門の念仏大徳所行ではこのような文が示されている。

このゆゑに法師命終の時に臨みて、寺の傍らの左右の道俗、みな幡華の院に映ずるを見、ことごとく異香・音楽迎接して往生を遂げたまへるを聞く。（『註釈版七祖篇』二四八頁）

これは、法師が亡くなる時に寺のそばの左右にいる僧侶と俗人が全て異なる香りのする幡と花が寺に映るのを見て、法師は音楽に迎えられる往生を遂げるという幻想的な雰囲気や文で表しているということである。また、第六大門の義推ではこのような文が示されている。

命終に臨みて弟子に告げていはく、へ阿弥陀仏、もろもろの聖衆といまわが前にましますと。（『註釈版七祖篇』二七〇頁）

これは、法師が亡くなる前に弟子に「阿弥陀仏が多く、聖者とともに私の前におられる」ということを告げているのである。法師の弟子に対する発言は、第二大門の破異見邪執・心外無法で示された阿弥陀仏が聖者達とや

つてくるという部分につながるのである。第二大門と第六大門の文では、阿弥陀仏は走馬灯的な存在感をあらわしている。

第二節 『安樂集』に説かれる来迎と信心の関係

さらに、第七大門の此彼修道ではこのような文が示されている。

もし発心して西に帰せんと欲するものは、ひとへに小時の礼・観・念等をもつて、寿の長短に随ひて、命終の時に臨めば光台迎接して、迅くかの方に至りて位不退に階ふ。（『註釈版七祖篇』二七四頁）

これは、もしも悟りを得ようとする心を起こした時にしばらく礼拝・観察・念仏などの修行を生きている間に従って行えば、命が終わり亡くなる時に光り輝く蓮台に迎えられそこから迅速にかの国に至り退くことのない位に適合することが出来るということである。第十一大門の死後受生勝劣では二つの文で他力と阿弥陀仏の来迎について示されており、まず一つめの文ではこのように示されている。

もしよく信を生じて浄土に帰向し意を策まして専積なれば、命終らんと欲する時、阿弥陀仏、観音聖衆と光台をもつて行者を迎接したまふ。（『註釈版七祖篇』二八八頁）

これは、もしも信心をおこして浄土を願う心の働きを強くし修行に励めば、亡くなる時に阿弥陀仏と観音などの聖衆達が光り輝く蓮台へと迎えに来るということである。次にもう一つの文ではこのように示されている。

もしよく信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願じて、所修の行業ならびにみな回向すれば、命終らんと欲す

る時、仏みづから来迎して死王に干されず。（『註釈版七祖篇』二二八八頁）

これは、仏を信じる因縁をもって浄土に生まれたいと願いそのための修行を行えば亡くなる時に仏が迎えに来てくれ、地獄で閻魔大王に処罰を下されることはないということである。要するに、第十一大門の二つの文章は自分の心の中で何か悪いことを企むというようなやましい気持ちを一切持たずにただ純粹に浄土に往生したいという信念だけを持ち、修行をすることによってこの世を去った後に地獄行きになり罰が下されることはなく必ず良いことがあるという意味である。これらが『安樂集』における阿弥陀仏の来迎や他力について示した文であり、いずれも仏を信じて修行をすれば亡くなる時に阿弥陀仏がお前はよく修行を続けたと迎えに来てくれるという頑張れば最期にはいいことがあることを示しているのと同時に人間のエゴが如何なるものが試されることを示しているのである。以上が無相思想と有相思想の問題についてである。

第四章 『安樂集』と『往生論註』における自力・他力

第一節 『往生論註』における自力・他力

次に、『安樂集』における自力・他力について論じる。仏教において説かれている自力・他力は『安樂集』ではどのような説かれているのであろうか。はじめに曇鸞が著した『往生論註』にて説かれている自力と他力と比較をする。杉山裕俊が著した『安樂集』における自力・他力について¹では、曇鸞は自力・他力を「阿毘跋致獲得

の難易性の基準」として「難易二道」と示している。阿毘跋致、つまり悟りを得てから退くことのない地位を獲得するための難易度の基準が自力・他力で大きく異なるということであり、単純に自分一人と数人のどちらかで作業を行う時に費やす時間と労力の差についてである。確かに自力・他力とあるように誰かの助けがあるかないかでは人生において使う時間の量は大きく異なるものであり、一人で行うよりもやはり誰かの手助けが何人かあった方が作業時間を短縮させることが出来る。それが、仏教の世界においては阿毘跋致と難易二道として示されているのである。

難易二道について曇鸞の『往生論註』では「五濁の世、無仏の時代に阿毘跋致を求めることを難行道」（『註釈版七祖篇』四七頁）としており「阿彌陀仏の本願力によって浄土に往生し、往生した後に阿毘跋致を得る」という道を「易行道」としているのである。難行道とは五濁の世、つまり時代や思想などにおいて犯罪や戦争そして裏切りといった人間の汚い手法も厭わない狡猾な一面を現在でも報道番組で嫌でも頻繁に見受けることがある。その数は減少することなく増えていき、一つの歴史として刻まれていく。そういった目を背けたくなるような様々な汚れが存在する世界でなおかつ阿彌陀仏のいない時代に阿毘跋致の地位を得るために自分一人の力のみで修行を行うという難しい修行のことを示しているのである。一方易行道とは、現世にて阿毘跋致を得る難行道と違い阿彌陀仏の本願力で浄土に往生した後に阿毘跋致を得るという易しい修行のことを示しているのである。このように難行道と易行道は、意味からして修行の方法が異なっており完全に対照的なものとなっているのであり、自力・他力の一般的な意味として『往生論註』で示されているのである。また、易行道についても、『往生論註』に

おける目的は『無量寿経』所説の第十一、十八、二十二願という阿弥陀仏の本願力によって速やかに阿毘跋致を得る」ことであると示されている。曇鸞は『無量寿経』の所説を用いて阿弥陀仏の力について詳しく示しており、『往生論註』の本文では、「三願的証」としてまとめられている。まず第十八願の本文はこう示されている。

たとひわれ仏を得んに、十方の衆生、心を至して信樂してわが国に生ぜんを欲して、すなはち十念に至るまでせん。もし生ずることを得ずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法を除く。（『註釈版七祖篇』一五六頁）

第十八願では、もしも仏になった時に多くの衆生が心から仏を信じ喜び往生を願って念仏を行い往生出来なければ仏には絶対にならない。ただし五逆と誹謗正法をする者は除くということである。つまり、仏を信じてもまだなお往生することが出来ないということは悪行を働く悪い心を持っている者や仏教の教えを貶す者を除いてまづないという内容が示されている。曇鸞は第十八願についてこう示している。

仏願力によるがゆゑに十念の念仏をもつてすなはち往生を得。往生を得るがゆゑに、すなはち三界輪転の事を勉る。輪転なきがゆゑに、ゆゑに速やかなることを得る一の証なり。（『註釈版七祖篇』一五六頁）

曇鸞は、仏の力によって十念念仏を行い往生を得ることが出来、それによって欲や無欲といった三界に迷うことなく速やかに仏になることが出来るとし、それが阿弥陀仏の力を証明するものの一つめであると主張しているのである。『往生論註』ではこの十念念仏を易行道の行法としている。次に第十一願の本文はこう示されている。

たとひわれ仏を得んに、国のうちの人天、正定聚に住してかならず滅度に至らずは、正覺を取らじ。（『註釈

第十一願では、もしも仏になった時に国中の人々が仏になると決まっても必ず生死の迷いを超えた悟りに至ることが出来なければ仏になることはないという内容が示されている。曇鸞は第十一願についてこう示している。

仏願力によるがゆゑに正定聚に住す。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至りて、もろもろの回伏の難なし。ゆゑに速やかなることを得る二の証なり。（『註釈版七祖篇』一五六頁）

曇鸞は、仏の力によって仏になることが決まるので必ず生死の迷いを超えた悟りを得ることが可能であり後戻りすることはなく速やかに仏になることが出来るとし、それが阿弥陀仏の力を証明するものの二つめと主張している。最後に第二十二願の本文はこう示している。

たとひわれ仏を得んに、地方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らん。（『註釈版七祖篇』一五六頁）

ここで一度区切りをつける。第二十二願では、もしも仏になった時に他の国の菩薩達が我が国に誕生すれば次の生涯では必ず仏になることが出来る地位を与えようという内容が示されている。また次のように続いている。

その本願の自在に化するところありて、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。（『註釈版七祖篇』一五六頁）

ここでもう一度区切りをつける。これは、ただし各自の希望により衆生を自在に仏道に導き利益を与えるためにひろい誓いを立てて善行を行い全ての者を救う。そして、仏の国に多く出かけ菩薩として修行を行い色々な仏

を供養しガンジス河の砂ほどに限りない数の衆生を導きこの上ない悟りを得させることなどが自由に出来るという内容を示している。さらに次のように続いている。

常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を習得せん。もししからずは、正覚を取らじ。（『註釈版七祖篇』一五六―一五七頁）

これは、世間並みに菩薩の道を超えて修行を行うことが出来なければ仏になることはないという内容を示している。曇鸞は第二十二願についてこう示している。

仏願力によるがゆゑに、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修得せん。常倫諸地の行を超出するをもつてのゆゑに、ゆゑに速やかなることを得る三の証なり。（『註釈版七祖篇』一五七頁）

曇鸞は仏の力によって修行を行うことが出来速やかに仏になることが出来るとし、それが阿弥陀仏の力を証明するものの三つめと主張している。これが三願的証である。この後に曇鸞は「これをもつて推するに、他力を増上縁となす。しからざることを得んや。」（『註釈版七祖篇』一五七頁）とまとめている。曇鸞は、速やかに仏になることが出来るのは他力と縁があるからと示しているのである。このように、『無量寿経』の所説といった部分を用いることによって自力・他力及び易行道と難行道が交わることのない対となる二つのものであることを、曇鸞はよりはっきりと顕著に表したのである。これが、曇鸞が著した『往生論註』における自力・他力の思想についてである。

第二節 『安楽集』における自力・他力

さて、道綽の自力・他力についての考え方は序論で少し示したように、二つの要素に新たな役割を与えたのである。それについて、曇鸞の考え方と比較しながら論じる。この点について杉山裕俊は道綽の考え方についてこのように示している。

道綽は易行道を単に他力他摂の法門を規定しているわけではなく、そこには自力と他力の両面があることを明かしている。

曇鸞が難易二道という修行の道程を自力・他力の二つに分け完全に対立させたのに対して、道綽は易行道において自力・他力の二つが修行における一つの道程として意味を持つ役割を担っていることを示しているのである。『安楽集』における易行道とは、「現生で菩提心を発し、往生浄土を願いながら行を移すこと（自力）と臨終時に阿弥陀仏の来迎（他力）によって浄土へ往生するという二つの過程を経て成立する」と道綽は示している。つまり、現実世界にて悟りを求める心を起こし往生浄土を願って修行を行えば、亡くなる時に阿弥陀仏が迎えに来て浄土に往生することが出来るということである。道綽は自力と他力に新たな意味をもたらしたのである。道綽は第三大門の難易二道にて易行道についてこう示している。

（易行道）といふは、いはく、信仏の因縁をもつて浄土に生ぜん願じて、心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば、仏願力のゆゑに即便往生す。（『註釈版七祖篇』二三四頁）

これは、易行道とは仏を信じ浄土往生を願って悟りを求める心を起こし善業を積み重ねいろいろな修行を行え

ば仏の力によって往生することが出来るということが出来る。要するに仏の力で往生するには、これらの条件が必要となるという意味でもあるのである。この「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」という部分は『往生論註』にはみられなかった一文であり、道綽はこの文章を追加することによって「易行道における発菩提心と実践の必要性を強調」したのである。つまり、悟りを求める心を起こすこととそのための行動力が重要であることを道綽は強く指摘をしたのである。また、易行道について次のような問答を設けている。

問ひていはく、菩提はこれ一なり。修因また不二なるべし。なんかゆゑぞ、ここにありて因を修して仏果に向かふを名づけて難行となし、浄土に往生して大菩提を期するをすなはち易行道と名づくるや。(『註釈版七祖篇』二三四頁)

これは、悟りの境地は一つなので悟りを得るための修行も一つであるはずであるのに、何故難行道と易行道と違った二つに分けられているのであろうかという問いを示している。この問いに対してこのような答えを示している。

答へていはく、もろもろの大乗経に弁ずるところの一切の行法に、みな自力・他力、自摂・他摂あり。何者か自力。たとへば人ありて生死を怖畏して、発心出家して定を集し、道を発して四天下に遊ぶがごときを名づけて自力となす。(『註釈版七祖篇』二三四頁)

これは、多くの大乗経の中で説かれている行法にはみな自力・他力や自力によってたもつことという意味であ

る自摂・他摂によつてたもつことがあるという意味である。また道綽は、曇鸞が著した『略論安樂浄土義』から「もろもろの大乗教に弁ずるところの一切の行法に、みな自力・他力、自摂・他摂あり」（『註釈版七祖篇』二三四頁）の一文と三願的証直後の文を引用しており、自力と他力について比喻表現を使用し解説をしている。例えば自力とは、迷うことを恐れた人間が悟りを求める心を起こして出家をし、禅定を修め神通力を起こし自由自在にありとあらゆる世界へ行くことが出来るという様なことを自力としているのである。また、他力についてはこのように示されている。

何者か他力。劣夫ありて己身の力に信せて驢に擲りて上らざれども、もし輪王に従へばすなはち空に乗じて四天下に遊ぶがごとし。すなはち輪王の威力のゆゑに他力と名づく。（『註釈版七祖篇』二三四頁）

例えば他力とは、下劣な人間が自分の力でロバに乗り空を登ろうとしても登ることは出来ない。しかし、理想的な王のお出ましに従えば空に乗ってありとあらゆる世界へ行くことが出来るというすなわち王の力によって実現されるといふ様なことを他力としているのである。自力・他力を以下のように例えた後に道綽はこのように示している。

ここにありて心を起こし行を立て浄土に生ぜんと願ずるは、これはこれ自力なり。命終の時に臨みて、阿弥陀如来光台迎接して、つひに往生を得るをすなはち他力となす。（『註釈版七祖篇』二三四～二三五頁）

道綽は、悟りを求める心を起こし修行を行うことが自力であるとし、亡くなる時に阿弥陀如来が迎えに来て往生することを他力であると示している。「ここにあり」と願ずるは」という一文は「心を起こし」と内容が同じ

であることから「易行道における往生の過程を自力・他力によって説明した箇所」と杉山の『安楽集』における自力と他力について」では推察がされているのである。第三章の第二節で示した第十一大門の「もしよく信干されず。」という文も「願生者が阿弥陀仏の来迎を蒙るためには、信仏の因縁だけではなく、自らの力によって実践行を修することが求められている」ということであり、易行道における自力と他力の両面性の部分と実践の必要性を強調しているのである。また易行道の目的について『往生論註』においては阿弥陀仏の本願力により阿毘跋致を獲得することであるが、『安楽集』における易行道の目的は阿毘跋致の獲得ではなく「釈尊の教えに従って浄土へ往生すること」であると示しているのである。それは、第五大門において「仏教」や「方便」にもとづく往生浄土を第一に説いている」ことから考えられている。

『往生論註』において第十八願を拠り所とした十念念仏が易行道の行法であるが、道綽は第三大門の聖浄二門判の最後に易行道の行法についてこう示している。

たとひ一形悪を造れども、ただよく意を繋けて専精につねによく念仏すれば、一切の諸障自然に消除して、
さだめて往生を得。（『註釈版七祖篇』二四二頁）

これは、たとえ悪を造り続ける人生であってもつねに念仏をし続けることを心がければ、修行を行うことにおいて邪魔になるものが自然と消滅し必ず往生を得ることが出来るということである。つまり『安楽集』においては、「阿弥陀仏に心を預け、ただひたすらに念仏すること」が易行道の行法としてしているのである。また、『往生論註』で言われる行法が十念念仏であるのに対して『安楽集』で言われる行法とはただひたすら念仏に専念し雑

念を取り払い心を澄ませる「念仏三昧」である。

念仏三昧は道綽にとっては「あくまでも自らの力で修すべき実践行」であって「自力によって易行道を歩み続けるからこそ、阿弥陀仏の来迎によって浄土へ往生する」のである。つまり、道綽は易行道とは阿弥陀仏の力だけでなく自分の力も使うべきであるとしているのである。これが、道綽が著した『安楽集』における自力・他力の思想についてである。

結論

道綽が『観経』にもとづき安楽浄土の往生を勧めると共に末法時代に浄土教を発展させるために著した『安楽集』の特徴には、仏教を学ぶにおいて自分の性格を客観視し自分に合った教法を選ぶ約時被機と主流となっている考えに従いつつ新しい独自の考えを取り入れる准通立別がある。そして、『安楽集』の著述の背景には道綽の時代において無相思想がマジヨリテイとなっておりその対となる有相思想は大乗仏教の空・無相の基盤から離れていとされ否定されており、浄土が修行において障害という風潮が強くなっていたのである。これに対して道綽は、他力の原理とは阿弥陀仏が迎えに来ることによって往生出来るのであり西方浄土の教えである大乗とのつながりを示し、無相思想と有相思想を一つに結びつけたのである。

『安樂集』における道綽の自力・他力思想が他の僧が著した書物における自力・他力思想と比べて如何なるものかについて、はじめに曇鸞の著した『往生論註』における自力・他力とは悟りを得てから退くことのない地位である阿毘跋致を獲得する時における難易度の基準であるとしている。曇鸞は、この基準を難易二道として自己一人の力で修行を行う難行道、阿弥陀仏の本願力によって往生した後に阿毘跋致を得る易行道と二つに分別し、自力・他力が対照的であり交わることを示したのである。また易行道について、『無量寿経』所説の第十一、十八、二十二願という阿弥陀仏の本願力によって阿毘跋致を得ることが目的であると示している。

次に『安樂集』における自力・他力とは、曇鸞が難易二道として自力・他力を完全に対立させたのに対して、道綽は易行道にて自力・他力が修行において一つの道程として役割を担っていると示したのである。また、『安樂集』における易行道は現世にて悟りを求める心を起こし往生浄土を願い修行を行えば亡くなる時に阿弥陀仏が迎えに来て浄土に往生することが出来るとしている。そして、『往生論註』における易行道の行法は第十八願を拠り所とする十念念仏であるのに対し、『安樂集』における易行道の行法はただひたすら念仏をすることに専念し雑念を取り払い心を澄ませる念仏三昧である。これは、自力により易行道を歩み続けるからこそ阿弥陀仏の来迎にて浄土に往生することが出来るという自力・他力の関係性を道綽は強調しているのである。

以上のように、道綽は自力・他力に新たな役割と意味を持たせたのである。そして、道綽は曇鸞からの影響を特に受けつつも、浄土や自力・他力に対する考え方を変えていき道綽自身の思想スタイルを『安樂集』という書物にすることで創りあげたのである。人間は生きていく間に様々なものを目にし、そこから影響を受けるか受け

ないかによって今後の人生は大きく変化する。それは、仏教の世界においてもまた同じなのである。

今後の課題としては何故道綽が曇鸞の影響を特に受けているのかを掘り下げていくべきではないかと考えている。序論にて道綽は曇鸞の碑文を読み浄土教に帰依したことや、曇鸞の思想や凡夫でありながら仏弟子として生きる姿勢に尊敬しているのではないかと示した。果たして、道綽は他の僧からはどのような影響を受けたのか、そして他の僧から受けた影響は曇鸞から受けた影響と比べて如何なるものであるのかを課題として探り今回の論文で書ききれなかった要所を作成すべきである。また、機会があるならば親鸞が示した自力・他力との比較も行う次第である。

参考文献

書籍

- 石井教道編『昭和 new 修法然上人全集』理想社、一九五五年
内藤知康『安楽集講読』永田文昌堂、一九九九年
渡邊隆生『安楽集要述』永田文昌堂、二〇〇二年

論文

- 入江公昭「『安楽集』における西方浄土観」『印度學佛教學研究』五八―二、二〇一〇年
入江公昭「『安楽集』における浄土理解の一考察」『印度學佛教學研究』五六―一、二〇〇七年
杉山裕俊「『安楽集』における自力・他力について」『印度學佛教學研究』六〇―一、二〇一一年
野村淳爾「『安楽集』における他力の一考察」『印度學佛教學研究』五八―一、二〇〇九年
藤丸智雄「『安楽集』の有相について」『印度學佛教學研究』五三―二、二〇〇五年
三浦大地「道綽の善知識観」『大谷大学大学研究紀要』三五、二〇一八年